



Data

監督：アイラ・サククス
 出演：イザベル・ユベール／ブレン
 ダン・グリーソン／マリサ・
 トメイ／ジェレミー・レニエ
 ／パスカル・グレゴリー／ヴ
 イネット・ロビンソン／アリ
 ヨン・バカレ／グレッグ・キ
 ニア／カルロト・コッタ／セ
 ニア・ナニユア

■ショートコメント■

◆ウィキペディアでは「本作は批評家から好意的に評価されている。」と書かれている。また、『エル ELLE』(16年)、『シネマ 40』(31頁)で大胆なレイプシーンに挑戦したフランスの女優イザベル・ユベールの主演だから、それなりの注目作だが、本作は『最高の人生の見つけ方』(07年)、『シネマ 20』(329頁)のように、近時やたら多くなっている終活映画とも呼べそうな映画の一本だから、イマイチ食指が湧かなかった。しかし、相対的な選択の中で本作を鑑賞することに。

◆本作のチラシにある、見どころとストーリーは次のとおりだ。

迎えた最後の夏。ポルトガルの世界遺産シントラの町を舞台に、女優フランキーが仕組んだ〈家族劇〉とは――。

女優フランキーは、夏の終わりのバケーションと称し、ポルトガルの避暑地シントラに一族と親友を呼び寄せる。自らの死期を悟った彼女は、亡きあとも皆が問題なく暮らしているよう、段取りを整えようとしたのだ。しかし、それぞれに問題を抱えた家族たちは、次第にフランキーの思い描いていた筋書きから大きく外れていき――。アイラ・サククス監督の前作に惚れ込んだイザベル・ユベールが自らラブコールを送り、それを受けた監督がユベールのために書き下ろした本作。協を固めるのは、ブレンダン・グリーソン、マリサ・トメイ、ジェレミー・レニエ、グレッグ・キニアら豪華実力派俳優陣。彼らが演じる、フランキーのワケありな親族や友人が繰り広げる人間模様も見どころの一つだ。群像劇かのように見えていた物語の断片が、次第にパズルのように組み合わさり、やがて登場人物全員が初めて一堂に会して迎えるエンディング、私たちはその思わぬ感動に胸を打たれる。

幻想的な森、迷路のような路地、西の果ての海――類稀なる美しさを誇るポルトガル・シントラ

本作のもう一つの主役と言えるのが、イギリスの詩人バイロン卿に「この世のエデン」と称されたポルトガルの世界遺産の町シントラ。フランキーがあてどなく彷徨う深い森、人生に迷う家族たちが往来する迷路のような路地、そしてユーラシア大陸の西の果ての広大な海に沈む燃えるような夕陽など、このうえなく神秘的で美しい世界が私たちを魅了する。



◆結果は、やっぱり失敗……。本作は、主人公の女優・フランキー（イザベル・ユペール）が、現在の夫だけでなく、別れた夫とその息子、現在の夫と正妻との間に設けた娘、その夫と娘、等々のワケありだらけの近親者や、映画関係の親友を招いた、ポルトガルのシントラという町での1日を描くもの。したがって、スクリーン上にはこれら多くの登場人物のさまざまな語らい（会話劇）が次々と登場してくる。

今のフランキーにとって、それが特別な意味のあるイベントであることは、彼女の病状が示される中で少しずつ明らかになってくるが、さあ、そこの彼女の狙いは何？私には、それがさっぱりわからないため、多くの登場人物たちが次々と続く詩的な会話の連続に、少しうんざり……。

◆本作は、イギリス人の詩人バイロン卿が、「この世のエデン」と称したという、シントラという町の、たぐいまれなる美しさが1つの売り。たしかに、「まちづくり」や「都市計画」をライフワークとしている私の目にも、坂道だらけの、尾道のようなこの町は興味深いが、やっぱり映画は面白いストーリーがなくちゃ！

さらに、本作最大の売りは、ラストに訪れる登場人物全員が岬で夕日を眺めるクライマックスシーンだが、私には若干これも期待外れ。さて、あなたは……？

2020（令和2）年8月31日記